

チェンマイ日本語教室開校式 【式辞】

日本バプテスト海外伝道協会会長 森島牧人

本日は、ここに「チェンマイ日本語教室」の開校式を、皆様と共に祝いすることが出来ますこと、本当に感謝であります。この事に尽力して下さった、TKBC の総主事、JBU 総主事、来賓の皆さま、日本語教会長谷部愛美先生、日本語教室スタッフの方々、そして生徒の方々のご努力に、感謝いたします。

さて、私たち「日本バプテスト海外伝道協会」は、「だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にきなさい。」(マタ 28:19)との復活の主の派遣委託に答え、また私たちが所属する日本バプテスト同盟の諸教会・協力団体や世界のバプテスト教会の支えにより、今日も、この海外伝道への働きを進めることが出来ています。

というのも、私たちが所属する日本バプテスト同盟が、今日の教派の姿にまで形成され、成長できてきた背後には、米国をはじめとする世界の諸外国のバプテスト海外伝道協会、そして特に、それらの諸教会の信徒の篤い祈りと献金の支えがあったからです。まことに感謝に堪えません。

ですから、今日、私たち「日本バプテスト海外伝道協会」は、これまで頂いてきたその支援を、「Pay it Forward」(単なるお返しではなく、次へ渡そう)の意識を<信仰的にもって>、つまりただ頂く者に留まるのではなく、アジアのバプテスト諸教会と協働し、主にある兄弟姉妹への福音宣教の為に、私たちも用いられて行きたいとの思いに至ったのです。つまりこの感謝と祈りの中から、世界のバプテストの働きに協働し、同盟の宣教師達をアジア地域に派遣していきたいとの思いが、1969年の日本バプテスト同盟大会で結実して、この「日本バプテスト海外伝道協会」が生み出されたのです。この日は、私たち日本のバプテストが、100年にしてようやく「受ける教会」から「派遣する教会」へと成長を遂げることになった<記念すべき日>となったのです。

さて、私はこれまで、20年以上にわたって、毎年2月、8月、12月、タイ北部山岳少数民族(カレン族・アカ族)の村での奉仕教育プログラムに、青年たちと共に参加してきました。そこには、山肌にへばりつくように点在する、藁と竹でできた粗末な高床式の家々が並んでいました。雨季の時には土砂と共に流されてしまい、大きな

被害が出ました。そこで日本の青年たちは、平らな土地を切り開き、雨季の時のシェルター兼チャペルを、村人と共に建設してきました。私たちが建設したチャペルは、タイ北部山岳地帯で、すでに 14 棟あります。

村には、電気も水道もガスもありません。考えられないほど原始的で、不便で、貧しい生活が、そこにはあります。しかしそのような状況にもかかわらず、私たちが村人から感じる想いは、穏やかで心やさしく、一心に神を見つめる姿です。

現在私たちは、便利で物に溢れ返る、一見豊かな生活を送っていますが、決して満たされているわけではありません。“Einsam”という言葉があります。文字通り「孤独」という意味です。しかしドイツ語には、“Zweismal”という造語があります。二人でいても寂しい。否、二人でいる時に感じる孤独は、一人でいる時に感じる孤独より、寂しく切ないのです。多くのものに囲まれていても満たされず、不安で不幸な状態を表しています。人はむしろ豊かさの中で悩みが増し、心がすさみ、日々思い浮かべる不安の中に、自らの<不幸>を数えて、生きているのではないのでしょうか。

その私たちに比べると、山岳少数民族の村は、不便で貧しく何もないけれども、人々は、朝が明けると共に、賛美の歌声を上げ、そしてまた小さな蝋燭の明かりに顔を寄せ合いながら、夜が更けるまで神を讃えます。私は、その村人の姿の中に、恵みを数えて生きる、神にある<幸い>を見る思いがいたします。

今、私たちの世界は、日々平和を祈り、優しさを求め、そして豊かさを願いつつ生きています。しかし現実には、戦争、テロ、貧困、飢餓、差別、虐待、等々があり、多くの人々は不安を抱えています。一体、どこに問題があるのでしょうか。

まずは、「求める方向性」についてです。山の村で気づかされることは、私たちが日頃求めている方向性とは、多くの場合、「あなたは、私にもっと優しくあるべきだ！」と言うものではないのでしょうか。「私が、あなたにもっと優しくあるためには、どうすればいいのだろうか？」という方向性で、私たちは<優しさ>を考えているのでしょうか。

日本語の<優しさ>とは、「人」べんに「憂い」と書きます。つまりここで言う「優しい人」とは、おとなしいとか、弱々しい人という意味ではなく、「憂いを持ったことのある人」という意味です。かつて辛い思いをしたことがある。涙を流したことがある。そのような憂いを持ったことの経験が、人を優しくするのです。その涙の思い出が、いま見ている他者の中にもある、悲しみや絶望感と<共鳴>するのです。

故マザー・テレサは、「愛の反対は憎しみではない。<無関心>である！」と言い

ました。この言葉には真実があります。助けを必要としている人がいるのに、見ていたのに、分かっているのに、敢えて向こう側を避けて通っていった、あの「善いサマリア人」の譬え(ルカ 10:25-37)にある「積極的無関心」が、いま<神の国>を遠いところに押しやっているのです。

今、私たちが願うことは、心の内に他者への関心をもって、自分の人生を歩んで行きたいということです。主イエスは、幸いな人、それは平和をただ考え、また願う人ではなく、「平和をつくりだす、実現する人々は、幸いである。その人たちは神の子と呼ばれる」(マタイ5:9)と語っています。

キリストの教会に連なる私たちが、聖書が伝える、神と人ともに仕える豊かな心を、十分に発揮し、「キリストの香り」を放つものとして、他者と共に歩んで行くことが出来るように、主のお支えを、切にお祈り致します。

そしてまた、皆様にも、これからも、どうぞこの海外伝道協会の働きを祈りのうちに覚えていただき、共に支えて頂きますようお願い申し上げます。